

修士論文（要旨）
2024年1月

大学生の自己愛傾向と大学適応感との関連
—被援助志向性と援助要請スタイルに着目して—

指導 池田 美樹 准教授

国際学術研究科
国際学術専攻
心理学実践研究学位プログラム 臨床心理分野
222J2007
武田 礼人

Master's Thesis (Abstract)
January 2024

Relationship between university students' narcissistic tendency and subjective
adjustment: Focusing on help recipient orientation and help request style

Ayato Takeda
222J2007

Master of Arts Program in Clinical Psychology
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Miki Ikeda

序章	1
第1章：問題と目的	1
1. 1 援助要請行動	1
1. 2 青年期の友人関係と援助要請スタイル	1
1. 3 被援助志向性と援助要請	1
1. 4 自己愛	2
1. 5 自己愛傾向	2
1. 6 自己愛傾向と不適応	2
1. 7 自己愛傾向と被援助志向性	3
1. 8 青年期の自己愛傾向と援助要請行動における課題	3
第2章：研究方法	4
2. 1 調査対象者	4
2. 2 手続き	4
2. 3 期間	4
2. 4 質問紙の構成	4
2. 5 倫理的配慮	5
2. 6 仮説	5
第3章：結果	6
3. 1 自己愛傾向，被援助志向性，援助要請スタイル，大学適応感尺度の記述統計量	6
3. 2 自己愛傾向，被援助志向性，援助要請スタイル，大学適応感の性差の検討	7
3. 3 自己愛傾向と被援助志向性，援助要請スタイル，大学適応感との関連	7
3. 4 自己愛傾向，被援助志向性，援助要請スタイル，大学適応感を包括するモデルの検討	8
3. 5 自己愛傾向のパターンによる検討	10
3. 6 クラスタ間の差の検討	11
第4章：考察	12
4. 1 性差の検討	12
4. 2 仮説1の検証	12
4. 3 仮説2の検証	13
4. 4 仮説3の検証	13
4. 5 今後の課題・展望	15
参考文献	I

序章

第1章：問題と目的

1.1 問題と目的

他者に対して直接的な援助を求める行動を援助要請行動という (DePaulo, 1983)。石黒・榎本・山上・藤岡 (2016) は、援助要請スタイルの違いにより大学の生活適応感に差が生じるかを検討した。その結果、必要時にのみ援助を要請する自立型が必要であると示唆された。

自己愛傾向とは、一般青年における自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという強い欲求である (清水・川邊・海塚, 2014)。自己愛傾向の高い個人は、対人場面で攻撃的に振舞ったり、他者を卑下したりする不適応行動に結びつきやすい (Campbell, Brunell, & Finkel, 2006; Bushman & Baumeister, 1998; Smalley & Stake, 1996) ことも明らかになっている。自己愛傾向の高さによって、他者に対して否定的な印象を与えてしまい、孤立してしまい、不適応につながると考えられる。

援助要請は自分自身の対処能力の低さを他者に伝える側面を持つ (永井, 2016) ことから、自己愛傾向の高さが他者に援助を求めるかどうかについての認知的枠組みである被援助志向性 (水野・石隈, 1999) に影響すると考えた。

そこで、本研究では、大学生を対象として自己愛傾向が被援助志向性、および援助要請スタイルと適応感に及ぼす影響について以下の仮説を検討することを目的とする。

第2章：研究方法

2.1 調査対象者

都内のA私立大学に在学している18~24歳の大学生・大学院生229名を対象にした。

2.2 手続き

対面とオンラインの2つの方法で質問紙調査を実施した。

2.3 期間

2023年5月19日~2023年7月14日

2.4 質問紙の構成

- I. 自己愛傾向 小塩 (1998) の自己愛人格目録短縮版 (NPI-S)。「優越感・有能感」, 「注目・賞賛欲求」, 「自己主張性」の3つの下位尺度から構成される。30項目, 5件法。
- II. 被援助志向性 本田・新井・石隈 (2011) の被援助志向性尺度。「被援助に対する期待感」, 「被援助に対する抵抗感」の2つの下位尺度から構成される。本研究では、「援助者」という表現を「友人」に修正したものを使用する。13項目, 4件法。
- III. 援助要請スタイル 永井 (2013) の援助要請スタイル尺度。「援助要請自立型」, 「援助要請過剰型」, 「援助要請回避型」の3つの下位尺度から構成される。本研究では、自立型と回避型に該当する8項目, 7件法を用いる。
- IV. 大学適応感 大久保・青柳 (2003) の大学生用適応感尺度。「居心地の良さの感覚」, 「被信頼・受容感」, 「課題・目的の存在」, 「拒絶感の無さ」の4つの下位尺度から構成される。29項目, 5件法。
- V. フェイスシート 年齢と性別に関する質問を設けた。

2.5 倫理的配慮

桜美林大学研究倫理委員会の承認を受けて行った (受付番号22074)。

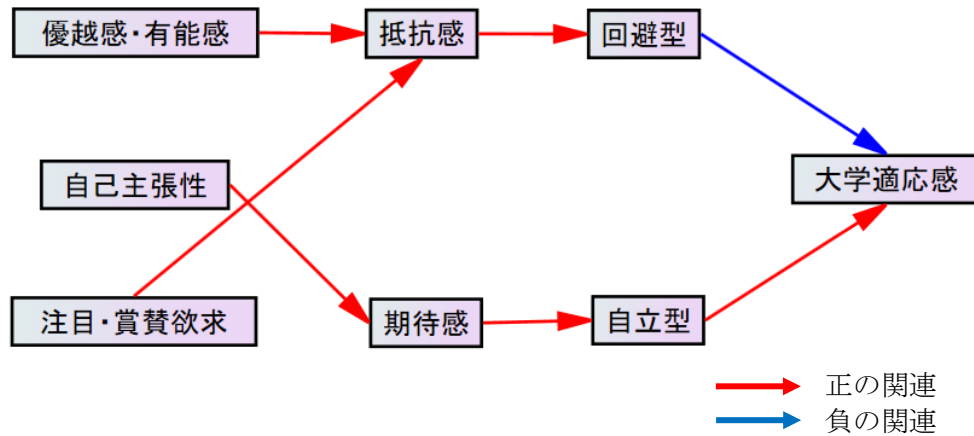
2.6 仮説

仮説1 「優越感・有能感」と「注目・賞賛欲求」が「被援助に対する抵抗感」に影響を及ぼし、回避型の援助要請スタイルを促進させる。「自己主張性」は「被援助に対する期待感」に影響を及ぼし、自立型の援助要請スタイルを促進させる (Figure 1)。

仮説2 「優越感・有能感」や「注目・賞賛欲求」は大学適応感へ負の関連を示し、「自己主張性」は大学適応感への正の関連を示す。

仮説3 自己愛傾向の他の下位因子に比べて「優越感・有能感」や「注目・賞賛欲求」が高い群では大学適応感が低く、「自己主張性」が高い群では大学適応感が高い。

Figure 1 本研究の仮説検討モデル

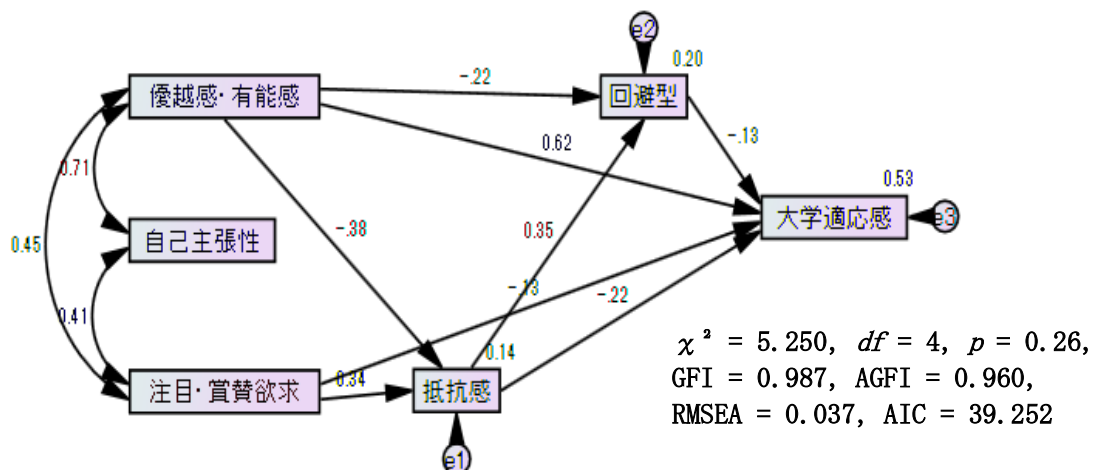


注) 「抵抗感」や「期待感」は被援助に対する認知的な枠組み,
「回避型」や「自立型」は援助要請行動を示す

第3章：結果と考察

3.1 自己愛傾向，被援助志向性，援助要請スタイル，大学適応感を包括するモデルの検討

自己愛傾向，被援助志向性，援助要請スタイルが大学適応感に与える関連を検討するためにパス解析を行った (Figure 2)。大学適応感に対しては、「優越感・有能感」が正の有意なパス、「注目・賞賛欲求」，「抵抗感」，「回避型」は負の有意なパスを示した。「注目・賞賛欲求」が高まることで、「抵抗感」や「回避型」が高まり，大学適応感が低まることが明らかになり，仮説1は部分的に支持された。また，大学適応感へのパス係数を比較すると，「優越感・有能感」のパス係数が0.68，「注目・賞賛欲求」のパス係数が-0.13であり，「自己主張性」においては有意なパスが見られず，仮説2は支持されなかった。



注) 「抵抗感」は被援助に対する認知的な枠組み,
「回避型」は援助要請行動を示す

3. 2 自己愛傾向が大学適応感に与える影響の検討

自己愛傾向のパターンに分類するために、自己愛傾向下位因子を用いて Ward 法によるクラスタ分析を行い、3つのクラスタを得た。クラスタ1「自己愛傾向低群」、クラスタ2「注目・賞賛欲求高群」、クラスタ3「自己愛傾向高群」ごとの被援助志向性、援助要請スタイル、大学適応感の差を検討するために1元配置分散分析を行った。その結果、大学適応感は、自己愛傾向高群>注目・賞賛欲求高群>自己愛傾向低群であった。このことから、自己愛傾向全体の得点が高いこと、「優越感・有能感」や「自己主張性」が高いことが大学適応感の高さに関係している可能性が示された。よって、仮説3は部分的に支持された。

自己愛傾向全体の得点が高いほど、大学適応感が高いという結果が得られたが、自己愛傾向を高まることで大学適応感を高めるとは言えない。自尊感情と関係のある「優越感・有能感」を高めつつ、特に不適的な側面を持つ「注目・賞賛欲求」が高くなりすぎないように自己愛傾向のバランスを保つことが大学適応感を高めることにつながると思われる。

参考文献

- American Psychiatric Association(1994). Diagnostic and statistical manual of mental disorders(4th ed.)Washington, DC: Author.
- 相澤直樹(2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, 50, 215-224.
- Butler, R. (1998). Determinants of help seeking: Relations between perceived reasons for classroom help avoidance and help-seeking behaviors in an experimental context. *Journal of Educational Psychology, 90*, 630-643.
- Campbell, W. K. Brunell, A. B., &Finkel, E. J. (2006). Narcissism, interpersonal self-regulation, and romantic relationships: An agency model approach. In K. D. Vohs &E. J. Finkel (Eds.), *Self and relationships: Connecting intrapersonal, interpersonal processes*. New York: Guilford. 57-83.
- Campbell, W. K. & Green , J. D. (2007), The narcissistic self: Background , an extended agency model, and ongoing controversies. InJ. V. Wood, A. Tesser, &J. G. Homes(Eds.), *The self and social relationships*, 73-94.
- Campbell, W. K., &Campbell, S. M. (2009). On the self-regulatory dynamics created by the peculiar benefits and costs of narcissism: A contextual reinforcement model and examination of leadership. *Self and Identity, 8*, 214- 232.
- DePaulo, B. M. (1983). Perspectives on help-seeking. In B. M. DePaulo, A. Nadler, & J. D. Fisher(Eds.), *New directions in helping*. Vol. 2 Help-seeking. New York: Academic Press. 3-12.
- Fromm, E. (1956). *The art of loving*. New York: Harper&Brothers. (フロム, E. 懸田克躬(訳)1959). 愛するということ 紀伊國屋書店)
- Gabbar, G. O. (1994). *Psychodynamic personality in clinical practice: The DSM-IV edition*. Washington, DC. :American Psychiatric Press. (ギャバード, G. O. 舘哲郎(監訳)(1997)精神力動的精神医学—その臨床実践 [DSM-IV版] ③臨床篇Ⅱ軸障害 岩崎学術出版社 pp. 83-116.)
- Goldsmith, D., &Parks, M. R. (1990). Communicative strategies for managing the risks of seeking social support. In S. Duck(Ed.), *Personal relationships and social support*(pp. 104-121). London, UK:Sage.
- 長谷川孝治(2009). 自尊心, 本来感, 自己価値の随伴性が適応に及ぼす影響, 日本社会心理学会, 50, 532-533.
- 肥田乃梨子・田中あゆみ・石川信一(2015). 大学生の援助要請スタイルの違いがストレス反応および友人関係満足感に及ぼす影響 日本教育心理学会, 57, 355.
- 本田真大・新井邦二郎・石隈利紀(2011). 中学生の友人, 教師, 家族に対する被援助志向性尺度の作成 カウンセリング研究, 44, 66-75.
- 本田真大・永井智(2020). 若者と成人を対象とした援助要請の最適性の実態把握および被援助志向性との関連 カウンセリング研究, 53, 1-11.
- 本嶋可奈子(2006). 青年期における対人的葛藤のあり方と自己愛傾向との関連 九州大学心理学研究, 7, 125-137.
- 石黒良和・榎本玲子・山上精次・藤岡新治(2016). 援助要請と生活適応感の関連性: 自尊感情と他者軽視の観点から 専修人間科学, 6, 31-40.
- Joiner, T. E., Jr., Metalsky, G. I., Katz, J., &Beach, S. R. H. (1999). Depression and excessive reassurance seeking . *Psychological Inquiry, 10*, 269-278.
- 金子杏弓・高橋史(2018). 被援助志向性, 心理的負債感, 抑うつが援助要請行動に及ぼす影響信州心理臨床紀要, 17, 19-28.
- 小西瑞穂・大川匡子・橋本幸(2006). 自己愛人格傾向尺度(NPI-35)の作成の試み パーソナリティ研究, 14, 214-226.
- Lasch, C. M. (1979)*The culture of narcissism*. New York: W. W. Norton&Co., Inc. (石川弘義(訳)1981 ナルシシズムの時代ナツメ社)

- 三船直子・氏原寛(1991). 青年期の自己愛人格について—実証的研究を中心にして— 大阪市立大学生生活科学部紀要, 39, 199-213
- 松井豊(1996). 親離れから異性との親密な関係の成立まで 斎藤誠一(編) 青年期の人間関係 (pp. 19-54) 培風館
- 水野治久・石隈利紀(1999). 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, 47, 530-539.
- 村山航・及川恵(2005). 回避的な自己制御方略は本当に非適応的なのか 教育心理学研究, 53, 273-286.
- 永井暁行(2016). 大学生の友人関係における援助要請及びソーシャル・サポートと学校適応の関連 教育心理学研究, 64, 199-211.
- 永井智・新井邦二郎(2007). 利益とコストの予期が中学生における友人への相談行動に与える影響の検討 教育心理学研究, 13, 65-76.
- 永井智(2013). 援助要請スタイルの作成—縦断調査による実際の援助要請行動との関連から— 教育心理学研究, 61, 44-55.
- 永井智(2016). 大学生の友人関係における援助要請およびソーシャル・サポートと学校適応の関連 教育心理学研究, 64, 199-211.
- 永井智(2019). 援助要請スタイル間の差異に関する探索的検討 教育心理学研究, 67, 278-288.
- 中山留美子・中谷素之(2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学研究, 54, 188-198.
- 新見直子・川口朋子・江村理名・越中康治・目久田純一・前田健一(2007). 青年期における自己愛傾向と自尊感情 広島大学心理学研究, 7, 125-138.
- 岡田努(2007). 大学生における友人関係の類型と, 適応及び自己の諸側面の発達の課題について パーソナリティ研究, 15, 135-148.
- 岡田涼(2009). 青年期における自己愛傾向と心理的健康: メタ分析による知見の統合 発達心理学研究, 4, 428-436.
- 小此木啓吾(1981). 自己愛人間 朝日出版社
- 大久保智生・青柳肇(2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の視点から— パーソナリティ研究, 53, 38-39.
- 小塩真司(1997). 自己愛傾向に関する基礎的研究: 自尊感情, 社会的望ましさととの関連 名古屋大学教育学部紀要, 44, 155-163.
- 小塩真司(1998a). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司(1998b). 自己愛傾向に関する一研究—性役割観との関連—名古屋大学教育学部紀要, 45, 45-53.
- 小塩真司(1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方の関連 性格心理学研究, 8, 1-11.
- 小塩真司(2000). 自己愛的な青年の面接調査—対人関係に着目して— 日本心理学会, 64, 970.
- 小塩真司(2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み 友人関係と適応, 友人によるイメージ評定から見た特徴 教育心理学研究, 50, 261-270.
- 小塩真司・井上剛(2002). 自己愛傾向の一般青年群と臨床群の比較の試み 性格心理学研究, 11, 56-57.
- 小塩真司(2004). 自己愛の心理学 ナカニシヤ出版
- 小塩真司(2013). 自己愛傾向『最新 心理学事典(藤永保 監修)』 平凡社
- Paulhus, D. L. (1998). Interpersonal and intrapsychic adaptiveness of trait self enhancement: A mixed blessing? *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1197-1208.
- Pulver, S, E. (1970). Narcissism The term and the concept. *Journal of American*

- Psychiatric Association*, 18, 319-341.
- Raskin, R., & Hall, C. S. 1981 The narcissistic personality inventory: Alternate form reliability and further evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, 45, 159-162
- 相良麻里(2006). 青年期における自己愛傾向の年齢差 パーソナリティ研究, 15, 661-63.
- 白井利明(2006). 現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴: 変容確認法の開発に関する研究(Ⅲ) 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門: 教育科学, 54, 151-171.
- 漆山まみ(2013). 大学生の友人に対する援助要請行動が適応感に与える影響 武蔵野大学心理臨床センター紀要, 13, 31-42.
- 清水健司・岡村寿代(2010). 対人恐怖心性—自己愛傾向 2次元モデルにおける認知特性の検討—対人恐怖と社会恐怖の異同を通して— 教育心理学研究, 58, 23-33.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2014). 自己愛傾向と対人恐怖心性がバウムテスト指標に及ぼす影響 信州大学人文科学論集, 1, 117-125.
- Smalley, R. L., & Stake, J. E. (1996). Evaluating source of ego-threatening feedback: Self-esteem and narcissism effects. *Journal of Research in Personality*, 30, 483-495
- 心理学辞典(1999). 自尊感情 有斐閣, 343-344.
- Stolorow, R. D. (1974) Toward a functional definition of narcissism *International Journal of Psychoanalysis*, 56, 179-185.
- Sullivan, K., Marshall, S. K., & Schonert-Reichl, K. A. (2002). Do expectancies influence choice of help giver? Adolescents' criteria for selecting an informal helper. *Journal of Adolescent Research*, 17, 509-531.
- 竹澤みどり・小玉正博(2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52, 310-319.